

三年テストⅢ 国語

二〇二一・十一・五(金) 一校時

・すべての解答は、解答用紙に楷書でいいいに記入してください。

一、次の傍線部の漢字をひらがなに、ひらがなを漢字に直しなさい。

【知・技十六点】

- | | | | |
|----------|-----------|-----------|----------|
| ①きげんがよい | ②社員をこようする | ③他人ぎようぎ | ④のうこうと牧畜 |
| ⑤外国かわせ相場 | ⑥完成をあきらめる | ⑦四国へふにんする | ⑧もうしよの夏 |
| ⑨所望の品 | ⑩賞を賜る | ⑪哀悼の意 | ⑫知識を駆使する |
| ⑬水稻の栽培 | ⑭会場で赴く | ⑮抑揚をつける | ⑯試供品の頒布 |

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

【知・技四十点】

月日は――⑦。舟の上に生涯を浮かべ、――①。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の②破屋にくもの古巢を払ひて、やや年も暮れ、春立てるかすみの空に、白河の関越えむと、そぞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず。もも引きの破れをつづり、笠の緒付け替へて、三里に灸据うるより、松島の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲り、杉風が別墅に移るに、面八句を庵の柱に懸け置く。

三代の榮耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。――⑦。③高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、蝦夷を防ぐと見えたり。――⑤。⑤義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の草むらとなる。④国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷き

- B 夏草やつはものどもが夢の跡
C 卯の花に兼房見ゆるしらがかな

――④。耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散りうせて玉の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の草むらとなるべきを、四面新たに囲みて、i 薨を覆ひて風雨をしのぎ、――⑦。千歳のii記念とはなれり。

- D 五月雨の降り残してや光堂

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覚大師の開基にして、殊に清閑の地なり。一見すべきよし、人々の勧むるによつて、尾花沢よりとつて返し、⑤その間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。iii麓の坊に宿借り置きて、山上の堂に登る。岩にiv巖を重ねて山とし、松柏年ふり、土石老いて、苔滑らかに、岩上の院々扉を開けて物の音聞こえず。岸を巡り岩を這ひて、仏閣を拝し、佳景寂寞として心澄みゆくのみおぼゆ。

- E 閑かさや岩にしみ入る蟬の声

問1 (㉞) (㉟) (㊱) に入る文を、すべて現代仮名遣いで書きなさい。

問2 傍線①「古人も多く旅に死せるあり」について、次の問いに答えなさい。

- i 古人とは具体的に誰のことですか。二人の名前を正しく書きなさい。
ii この文から読み取れる作者の考えを、次から一つ記号で選びなさい。
ア 旅中の死を人生の目的とした彼らのように、旅の途中で死にたい。
イ 人生を旅とし、旅中で日々を過ごしていた彼らのように、生きてみたい。
ウ 旅に出て旅中で死ぬことを選んだ彼らのように、生きてみたい。
エ 旅中で素晴らしい作品を残した彼らのように、旅の作品を残したい。
オ 旅の途中で死んだ彼らのように、旅に出て死んでも後悔はしない。

問3 傍線②「破屋」と同じ意味の言葉を、文中から二つ抜き出しなさい。

問4 (㉞) (㉟) (㊱) (㊲) (㊳) にあてはまる言葉を、次からそれぞれ記号で選びなさい。
ア しばらく イ まず ウ やがて エ かねて オ さても カ まづ キ さて

問5 傍線③「高館に登れば」とあるが、高館から見た景色はどんな様子であったか。適切なものを次から二つ、記号で選びなさい。

- ア 北上川が南部地方から流れてきている。
イ 和泉が城は、高館のそばに建っている。
ウ 北上川を隔てて金鶏山がよく見える。
エ 北上川が衣川の南を流れてきている。
オ 衣川は高館の下で北上川と合流している。

我々は普段、話を聞いたり、映像を見たりすることで、ボンヤリとではあるが、世界のあちこちに自分と同一ような存在が無数にいて、その無数の存在がそれぞれに世界を経験していると信じている。

(A)「それは絶えざる更新によってかろうじて維持されているに過ぎない。だから、情報が遮断されれば容易に崩れ去る。」

また、世界のイメージはあらかじめ存在しているのではなくて、絶えざる情報の摂取を通じて少しずつ作られるものだと思えば、その広がりには大きく個人差があることになるだろう。世界を自分なりにイメージできていると思っても、そのイメージが極めて(B)「されたものに過ぎない」とも十分あり得る。我々は地球の裏側にこれこれの国があることを知っている。(A)「名前を知っているだけだ。世界をイメージすることはとても難しい。」

こんなことを書いたのは、最近私が字幕翻訳を担当したフランスの哲学者ジル・ドゥルーズのインタビューに、世界のイメージに関わる話が出てきたからである。

たとえば、フランスなんかでの住所の書き方を思い出してみるといい。最初に、番号と通りの名前を書く。その後、たとえば「パリ」などと都市名を書いて、更に「フランス」などと国名を書く。この住所の書き方では、自分から出発して遠くに向かうという仕方で物事を知覚しているわけだ。しかし、日本人は①全く違う仕方で物事を知覚するらしい。だから彼らの住所表記では、自分の番地が最後に来る……。

冗談か本気かよく分からないとえ話だが、重要なのは、自分から出発する知覚と、周辺から出発する知覚というこの二つの知覚の違いである。たとえば、地理的には遠く離れている国で起こっている戦争をイメージして、そこにある不幸を実感できること。それは周辺から出発する知覚である。逆に、自分(たち)の地位をいかにして維持するかということばかりを考えているならば、その人は物事を②自分から出発してのみ知覚していることになる。

周辺から知覚できるということは、その人が世界を相当な広さでイメージできていることを意味する。自分には見えていないところ、自分が行ったことのない場所にも、自分と同じような存在がいて、何ごとかを経験していると想像できているということだ。そして、③そのような広がりをもった世界のイメージを獲得することはとても難しい。

「それ故であろう。世間ではよく、遠くで起こっていることへの注意を促したい時に、「これは私たちにも関係があることです。」と言われる。自分から出発する知覚ならば難易度は低いと考えられているのだ。しかし、この常套句は何かをごまかしているのではなからうか。というのも、自分と関係のない出来事というのは十分に考え得るからである。自分と関係のない出来事ならば考えなくてもいいのだろうか。たとえば、未来の話ならばどうだろう。」

身近なところから考えるというのはもちろん大切だ。しかし、だからといって、④自分と関係のない出来事について考えなくてもいいということにはならない。そして、そのような出来事を想像するためには、ある程度の広がりをもった世界のイメージがなければならぬ。私はそのような世界のイメージを形成していくために勉強があるのだと思っている。

※ 常套句：決まり文句

(国分功一郎「世界のイメージ」より)

問1 (A)に共通してあてはまる適切な言葉を次から一つ、記号で選びなさい。

ア あるいは イ つまり ウ しかし エ それで オ また カ よって

問2 (B)にあてはまる言葉として適切なものを次から一つ、記号で選びなさい。

ア 統一 イ 画一 ウ 限定 エ 拡散 オ 特定 カ 凝縮

問3 傍線①「全く違う仕方」とは、どのような仕方ですか。十五字以上二十字以内で答えなさい。

問4 傍線②「自分から出発してのみ知覚している」とこの例として適切なものを次から一つ、記号で選びなさい。

ア アジアやアフリカ諸国の貧困問題を勉強し、国際的な支援について自分なりに考える。
イ 兄弟が言い争っているのを見て、仲直りをするまで自分の部屋にいて自分なりに考える。
ウ 戦争小説の主人公に自分を重ねて、戦争が私たち人類にもたらす悲劇について考える。
エ 氷がとけていく南極の生物の暮らしを想像して、自分にもできる温暖化対策を考える。
オ 町内会で役員不足が問題化していることを知り、自分にできることがないか考える。

問5 傍線③「そのような広がりをもった世界のイメージ」とは、どのようなイメージですか。「イメージ」につながる言葉を文章中から抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

問6 傍線④「自分と関係のない出来事」にあてはまるものには何がありますか。【 】の段落中から二つ、抜き出しなさい。

問7 傍線「情報が遮断されれば容易に崩れ去る」とありますが、それを防ぐために、筆者はどうする必要がありますか。「摂取」「広がり」「勉強」という言葉を使って、六十字以上七十字以内で書きなさい。ただし、「広がり」は名詞として使うこと。

問6 傍線④「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」について、次の問いに答えなさい。

- i この文は中国の漢詩を引用しています。引用された漢詩の「題名」と「作者名」を漢字で書きなさい。
- ii 作者が描写した風景の中に、姿をとどめている「山河」に当たる物が三つあります。その名前を文中から抜き出しなさい。

問7 傍線部 i 「薨」・ ii 「記念」・ iii 「麓」・ iv 「巖」の読みを現代仮名遣いで書きなさい。

問8 傍線⑤「その間七里ばかりなり」とありますが、「その間」とは、どことどこの間ですか。文中から抜き出しなさい。

問9 A～Eの俳句について、次の問いに答えなさい。

- i 体言止めが使われている俳句を全て選び、記号で答えなさい。
- ii Aの俳句の「感動の中心」となる言葉を抜き出しなさい。
- iii Cの俳句の季語と季節を答えなさい。

問10 この文章の、ア「作品名」、イ「作者名」、ウ「成立時代」、エ「ジャンル」を正しく書きなさい。
イ、エは漢字で書くこと。

問11 この文章から作者のどのような思いがうかがえますか。「自然」「人間」という言葉を使い、「～」という思いに続く形で、二十字以上三十字以内で書きなさい。

三、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

【思・判・表十四点】

⑦がさつとわずかな音が聞こえたように思ったが、後からゆっくり思い直してみれば、①それは気のせいだったのだろう。

私はぐったりした気分でした。ところどころに石段のまじった坂道を登ってきて、④この社の軒下に腰を下ろした。長い道程であればともかく、そして夏のはげしい陽射しのなかならばともかく、さわやかな（A）の、その大気が日ごとに少しずつ暖められていく、歩く者にとってはこれ以上ない②好条件の時なのに、私は悲しくなるような息の弾み方であった。

もともと、昨晩は、一日の③さばさばと仕事を忘れていられる時間を作り出すために、夜明け近くまで起きていて、⑤ふだんの倍に近い量の原稿を書き、ろくろく眠らずに家を出てきた。そんなことは無理だったのかと、それを悟って、あまり遠い山道を歩くのはあきらめて、古い社で休んでいた。

その時、突然私の頭上の軒のあたりから飛び立っていったのは、すぐにそれと分かる一匹の瑠璃立羽であった。その突然の、一瞬の驚きが、音を思わせたのである。この連想がおかしかった。蝶はそのまま、私が登ってきた坂の方へと飛び、何か思い出したことでもあったように、木々の間を巧みに抜けて梢の方へと舞い上がり、日光をたっぷり浴びて消えていった。それは④長い冬ごもりから解放されたものが、久々の飛翔で、羽を動かしているうちに、日光という気分のいい暖かさを思い出した姿であった。

⑤それから私は立ち上がった。社の軒のあたりを丹念に見てまわった。その瑠璃立羽が冬をひっそりと過ごしてきた場所を探してみると同時に、その仲間がまだどこに残っているかもしれないと思ったからだ。越冬する蝶は、しばしば木の穴などに数匹集まっていることがあって、そういう時は、連れ立って飛び立つものか、それとも、いくらかの時間をおいて一匹ずつ飛んでいくものか、それが分かるかもしれないと思った。私は何も夢見はしなかったが、気が付いてみると自分の体からだるさがすっかり抜けていた。社の裏手からの山道は細かったが、私の足は軽くなり、計画したとおりに一日の山歩きができそうだった。

※ 社（やしろ）：神社

※ 軒（のき）：屋根の下の張り出した所、ひさし。

※ 瑠璃立羽：タテハチョウ科のチョウ。

問1 傍線①「それ」は何を指しますか。文中の言葉を使い、「～こと」につながるように書きなさい。

問2 （A）にあてはまる季節を、次から記号で一つ選びなさい。

また、その季節であることがわかる「蝶」についての表現を、文中から十三字で抜き出しなさい。

ア 早春 イ 晩春 ウ 晩夏 エ 晩秋 オ 初冬

問3 傍線②「好条件」の内容が具体的に情景描写されている部分を二十五字以上三十字以内で抜き出し、初めと終わりの三字ずつを書きなさい。

問4 傍線③「さばさばと」の意味を、次から一つ記号で選びなさい。

ア ゆっくりと イ しみじみと ウ のんびりと エ すっきりと オ そわそわと

問5 傍線④「長い冬ごもり」とありますが、文中で冬ごもりの様子を表している擬態語を抜き出しなさい。

問6 「私」のいる場所を、「山道の」に続けて十五字以内で書きなさい。

問7 ～～線⑦⑧の「私」の行為を、時間の経過に従って、早いものから順に並べ替えなさい。

虫は、すずむし。ひぐらし。①てふ。松虫。きりぎりす。はたおり。われから。ひをむし。蛭。

松虫

鈴虫

こおろぎ

きりぎりす

海藻に付く虫

かげろう

みのむし、いとあはれなり。鬼の生みたりければ、親に似て②これもおそろしき心あらんとて、親のあやしき
かわいそうだ

恐ろしい気性があるだろうと思って 粗末な

衣ひき着せて、「いま秋風吹かむをりぞ来んとする。待てよ。」と③言ひおきて、逃げていにけるも④知らず、
やがて秋風が吹く頃に来ようと思う

風の音を聞き知りて、⑤八月ばかりになれば、「ちちよ、ちちよ」とはかなげに鳴く、いみじうあはれなり。

蠅こそにくきもののうちに入れつべく、⑥愛敬なきものはあれ。人々しう、かたきなどにすべきものの大き

憎らしいものの中に入れてもよいほど かわいげのないものだよ 人間並みに扱って敵などにするほどの体の大きさ

さにはあらねど、秋など、ただよろづの物にゐ、顔などに、ぬれ足してゐるなどよ。人の名につきたる、いと
ではないが いろいろな物にとまって 濡れたような足で止まっているよ 人の名に（蠅という字）が

うとまし。

ついているのは実にいやな感じがする。

夏虫、⑦いとをかしうらうたげなり。火近うとりよせて物語など見るに、草子の上などに飛びありく、いと

蛾は

本

をかし。

問1 傍線①「てふ」を現代仮名遣いに直しなさい。

問2 傍線②「これ」は何を指しますか。文中から抜き出しなさい。

問3 傍線③「言ひおきて」、傍線④「知らず」の主語を、それぞれ文中から抜き出しなさい。

問4 傍線⑤「八月ばかりになれば、「ちちよ、ちちよ」とはかなげに鳴く」とありますが、八月頃になると、
何故鳴くのですか。現代語で二十字以上三十字以内で答えなさい。

問5 傍線⑥「愛敬なきもの」とありますが、蠅のどのようなところがかわいげがないと言うのですか。

「うところ」につながるように、文中から二十五字前後で抜き出し、はじめと終わりの三字ずつを書きなさい。

問6 傍線⑦「いとをかしうらうたげなり」について、次の問いに答えなさい。

i 全て現代仮名遣いに直しなさい。

ii 意味として最も適切なものを、次から一つ記号で選びなさい。

ア とても面白く変わっている。

イ とても美しく優雅である。

ウ とてもうるさくてうつとしい。

エ とても不思議で気持ち悪い。

オ とても趣があつてかわいらしい。

問7 この文章は、冒頭が「春はあけぼの」で始まる随筆文である。作品名と作者名と成立時代をそれぞれ漢字で
書きなさい。